

第一章

本当は今も、帰りた場所がある。

小夜は小さくため息をついた。

揺れる馬車の車窓からは、ベトログラードの街並みが見える。ピョートル大帝の世にドイツやイタリアから建築家を呼び寄せて造られたという街には、黄色やピンクの華やかな色の外壁を持つ邸、教会などが今も立ち並んでいた。

元々は湿地帯だった土地を埋め立てた街だけに、運河が縦横に走り、全体は大小一九の島で構成されている。ロシアきっての水の都だ。

(晴れてたら、もっと綺麗だったかな)

空一面を重く塞ぐ鈍色の雲は、マロイズと呼ばれる大寒波の訪れを予感させた。無意識のうち首をすくめる小夜の黒髪は、この年頃の少女には珍しく短い。

細くしなやかな髪は、丸く形の良い頭や細い顎の輪郭をすっきりと際立たせていた。自然な癖のおかげで、手を入れなくとも襟足で少し外向きにはねている。

身に纏ったワンピースは、黒髪がよく映える深紅色のヴェルヴェット地だ。襟は華奢な顎の輪郭と首の細さを最大限いかすかのように高く立てられたデザインで、縁の裏側から黒い幅広のレースと毛皮が二重に縫いつけられている。肩の部分だけほんの少しふくらませた袖はそこから先はびったりと腕を包み、袖口で再び広がって襟元と同じレースと毛皮を施された袖は袖ぐりには、生地とはほんの少し色味の異なる赤い絹糸で植物の蔓だけが刺繍されている。その上に四つ連なる黒蝶貝の釦は、薔薇の形に彫刻されていた。ふくらんだスカートの上には、袖と同じ刺繍の入ったケープがのっている。

隙なく体を包む露出の少ない服は、かえって小夜の頼りないほどの細さを浮き彫りにしていた。

だが一見して弱々しい印象を受けることがないのは、きりっと形良く弧を描く眉と黒目がちな瞳からどこか芯の強さがうかがえるからだだろう。反面、いつも艶やかに濡れたような唇は、ふっくらと丸く厚い。

その唇をわずかに開いたまま見上げる街の中心地では、そここの公官庁らしい建物にこの地を治めるロマノフ家の紋章、双頭の鷲と聖ゲオルギウスのレリーフが刻まれ、道行く者を睨みつけている。

(なんだか、見張られているみたい……)

「……疲れてしまいましたか、小夜」

ため息が耳に留まったのか、隣に座った青年がやさしい声音で訊ねてきた。

ゆるく波打つ長い黒髪を細いリボンで無造作に束ね、落ちかかるままに任せた前髪の下には夏の夜のような青い瞳がのぞく。

濃い睫がその切れ長の瞳に陰影を作り、ときおり物憂げに見えることさえどこかエキゾチックで見る者の目を奪わずにはいられない。もつとも、当の本人はまったくそんなことに頓着していない様子で飄然としてるのがこの青年の大きな特徴だ。

彼はウイングカラーのシャツに、髪を結ぶものと同じほとんど黒に近い濃紺のリボンタイを結び、銀鼠の絹のベスト、その上に濃紺の長いジャケットという出で立ちだった。大きく折り返した襟と袖に同系色の革で縁取りが施されているだけで、華美な装飾はない。

それでも充分に品良く見えるのは、それらが上質のものであるのと同時に、やはり彼の持つ雰囲気依るところが大きい。ジャケットの下に隠れるシャツの袖口の釦だけが、小夜のもと同じ薔薇の細工が施されたものだった。

白い肌は冷たさを感じさせるが、小夜に向けられる眼差しだけはいつもやさしい。小夜は、自分が別に景色を見たいわけではなく、彼と向き合うのがなんとなく気まずくて車窓に張り付いていたことに気づく。

「大丈夫。でもちょっとお腹がすいたかな。ハジは？」

かぶりを振って明るく告げると、ハジもまた、穏やかに微笑んだ。

「私は大丈夫ですよ。……小夜」

うながされ、窓の外に視線を移す。馬車が横切ろうとしている広場の片側一杯に、大きな建

物が鎮座していた。

柔らかい緑色の壁。柱や窓枠は白く彩られている。それぞれの柱の根本と窓枠のレリーフは金細工で、屋根の上に据えられた何体もの彫像が小夜の目を引いた。

「——人がいるのかと思った」

珍しい意匠に心を奪われるのと同時に、なぜか胸がざわつくのを感じる。どこまでも重くのしかかる曇天を背後にそびえ立つ宮殿のあまりの巨大さと、人型をした緑色の彫像がそう感じさせるのかもしれない。

目を離せずにいると、背後でハジが告げる。

「冬の宮殿ですね。エルミタージュと呼ばれているとか」

「エルミタージュ……」

異国の地で、生まれ育った国の言葉を耳にするのはちょっと不思議な感じがする。懐かしいような、それでいて胸騒ぎがするような。

なんとなく、もう一度声に出さずに呟いてみる。

エルミタージュ。

(……隠れ家)

「小夜」

遠慮がちな呼びかけに目を覚ますと、ハジの顔がすぐ近くにあった。
「え、あ、朝？」

小夜は思わずそう漏らし、目に映るのが狭い馬車の車内だと気づくと薄く頬に朱を刷いた。あれから——エルミターージュを通り過ぎてさらに馬車に揺られるうち、いつの間にか眠ってしまったようだ。

「どうやらここが指示された場所のようです」

責めることはせずただ微笑んで、ハジはそう告げる。小夜は手早くケープを羽織りながら言った。

「私、長く眠っていた？ 起こしてくれたらよかったのに」

荷物はすでに送り届けられているはずで、手荷物は身の回りのものをまとめた鞆ひとつしかない。ハジが手を伸ばしてそれさえも奪おうとするから、小夜は眼差しだけで制して鞆をぎゅっと抱きかかえた。自分で出来ることは自分ですると決めている。

ハジは苦笑して、今度は馬車から降りるのを手伝うために手を差し出した。

「すみません。あまり気持ちよさそうに眠っているものですから」

「ずっと見てたの？ ……変な顔してなかった？」

「それはもう、よだれを垂らして」

「よだれッ？」

「——はいませんでしたけどね」

「……ハジ」

ぶっくりとした唇をすぼめて睨みつける小夜の手を取り、ハジは小夜を安全に降ろしてくれる。あらかじめ言いつけられていたのか、御者はわずかに振り返ってふたりが降りたことを横目で確認すると、なんの言葉もかけずに去っていった。

静けさだけが残されて、小夜は目の前の建物を見上げる。

白い外壁のやや小さな邸だ。と言っても、車窓から豪華な建物ばかりを見てきたからそう感じるのもあって、民家と比べたら数段立派なことには変わりはない。

そのとき、なにも言わずにハジが腕を伸ばして、小夜が先刻慌てて羽織ったケープの襟元のリボンを結び直した。

全体を整えると、穏やかに微笑みながら告げる。

「行きましようか」

「——うん」

いつも通り落ち着いていたその様子にうながされ、こっくりと頷く。そのときだった。

「——！！」

突然人影が目の前に現れて息を呑む。と同時に人影と小夜との間にはハジが回り込んでいて、小夜はその背中越しに人影——少年の姿を見た。さらに視線を走らせると、玄関ポーチの上のバルコニーの窓が開け放たれたままになっている。

（あそこから？ でも、今）

——全然気配がしなかった。

驚きの色を隠せない小夜に、少年はハジの鋭い視線ものともせず無遠慮な視線を投げかけてくる。わずかとはいえ殺気立つハジに、物怖じしない者は珍しい。彼の場合、そもそもがハジの存在など気に留めていないかのようだった。野生の獣が、一度狙った獲物以外は目に入らないかのように入らな。

一瞬身構えるが、少年の年格好が自分とそう変わらない——一六、七だ——ことや、その大きな瞳に一番色濃く浮かぶのはおそらく好奇心なのだと思いついて、小夜は徐々に緊張をほぐした。

そうやってあらためて見てみると、榛色と金色とが混ざった琥珀のような色合いの瞳は、大きくてやんちゃな印象さえある。癖なのか、短く刈られた明るい褐色の髪は奔放にはねていた。身長は小夜より頭ひとつ分高い。身につける白いシャツはアシメトリーに左胸で釦を留めるようになっている、肩口には赤い布と革でできた肩章がついている。なにか制服のように思えるが、少年はスタンドカラーの襟元の釦は外していた。

窮屈な格好が苦手なのかもしれない——小夜は知らず知らずのうちに笑みを浮かべた。

(よろしくって、言った方がいいのかな。……言った方がいいよね。仲間になるんだから)

小夜は少年と自分の間に立ちただかたまたまだったハジの腕に軽く触れる。それだけでハジは殺気を消し、すっと身を引いた。

「あの、」

「弱そうだな」

不意に少年が漏らす。それが自分のことを指しているのだと気づくのに少し時間がかかった。本人を目の前に行っていたが、まるで独り言のように放たれたからだ。

少年は、突然興味を失ったように踵を返した。

「なあ！」

見れば、いつの間にか玄関ポーチには家令らしき初老の男性が立っている。

「着いたぜ、〈SAYA〉」

少年はすれ違い様家令にそう告げて、さっさと中へ入っていった。

話しかけようと思ったのに——出鼻をくじかれて、小夜は半ば呆然と立ちつくす。

「……小夜」

気遣うように声をかけられ、小夜はハジを振り仰いだ。

「とにかく、行こ」

笑顔を作れば、彼はそれ以上にも詮索しない。案の定、ハジはなにか言いたげだった表情をすぐに微笑に変えて言った。

「そうですね。小夜の名を知っている以上、ここが指示された場所に間違いはないでしょうし」「うん」

「だけど。」

(あの人、一回もちゃんとこっちを見なかった)

小夜は鞆を抱きかかえ、ことさらに大股で歩いた。玄関ポーチにたどり着くと、家令が無言のまま深々と頭を下げ、ドアを開ける。中に入ると、半円形の玄関ホールの足下は白い大理石で敷かれていた。さらに黒い石で放射状に文様が入れられている。

外観同様内装は白を基調としてはいるが、正面に設けられた階段の手すりや壁の腰板は飴色に磨き上げられた檜材で、貴族が幾つか持つ邸のうちのひとつ、といった印象だ。

階段の両脇にあるアルコーブに備え付けられた暖炉には石炭が赤く燃え、中二階で左右に分かれる階段の踊り場には大きな壺が置いてある。外は厳寒だというのに、赤い薔薇があふれ出しそうなほどに生けてあった。

そつと背に触れるハジにうながされ、我に返った小夜はすでに歩き出していた家令の後を追う。廊下の奥に設けられた階段を下り、彼がふたりを案内したのは邸の半地下にある一室だ。

「皆様お揃いになるまで、しばらくこちらでお待ち下さい」

家令はそれ以上にも言わずにまた深々と礼をして去った。

「余計なことは言わないし聞かないってこと……か」

「取りあえず、掛けて待たせてもらいましょう。小夜」

「うん……」

うながされ、小夜は入り口が見えるよう長い檜材のテーブルセットの下座に腰を下ろす。ハジは座ることなく、脱いだケープを受け取るとその背後に立った。

所在なく見渡す部屋の右側の壁中央には白い大理石の暖炉があって、やはり火が入れられて

いる。壁の腰板も白く、壁紙は臙脂に金茶でアカンサスの葉の文様が刷り出してあった。小夜が腰を下ろす椅子にも、赤い地に金糸で植物文様が織り出されている。背もたれの縁も金に塗られていた。

そこが地上との境目なのだろう。側面の壁の天井際には、植物の蔓を象った鉄棒の嵌る、横長に細い窓が切られている。

その窓の向こうで馬車が止まった気配がし、やがてドアを開け閉めする物音と、人の気配が近づいてきて小夜は思わず立ち上がった。

やがて扉が開かれる。相次いで現れた少年は四人——黒い揃いの服を着ている。

上着の上から締める布のベルト、スタンドカラーの襟元、折り返した袖口はそれぞれ赤く、ゆったりとしたズボン、その裾を入れ込んで編み上げる革のブーツまでが全て黒一色だった。

肩章は赤い布と金モールで装飾されていて、黒い帽子の正面に金糸で施されているのはここへ向かう途中で目にしたレリーフと同じ——聖ゲオルギウスと双頭の鷲。どうやら士官学校の制服のようだ。

彼らの中では一番背の低い少年——小夜と同じくらいだろう——が迷うことなく小夜の反対側、長テーブルの上座に座った。

前髪を伸ばし、顎の辺りで切りそろえたまっすぐな髪は深いワインレッドで、眼鏡の下の賢しげな瞳は澄んだ茶色だ。顔つきは小夜より幼いほどなのに、洗紙に蠟をひいた大振りの封筒から書類らしきものを取り出して頁を繰る指先は、慣れた様子だった。

「小夜」

思わず見とれて立ちつくしていた小夜は、耳元でハジにそうながされ、やっと我に返ってすっと腰を下ろした。

小夜とは距離を取った上座寄りにはすでにふたり腰を下ろしている。もうひとり、先刻表で会った少年はじっとしていることが苦手なのだろう、腰掛けずに暖炉の脇に背を預けて立っていた。

上座に座った少年が書類から顔を上げ、彼を咎める。

「座ってください、ロジオン。それに黙って先に帰らないでくださいっていつも」

統率を取ろうと懸命なのだろうが、幼い顔つきに責めるような口調は、むしろ小夜に可愛らしさを感じさせた。眼鏡の下の眉間に寄る皺も、威嚇の意味をまったく成さない。それがいつものことなのだろう、ロジオンと呼ばれた少年はまったく意に介す様子もなく頭の後ろで手を組んで伸びをした。

「まどろっこしいんだよ、いちいち馬車待つの。走った方が速いし。〈SAYA〉、早く見たかったし」

自分の名を紡がれ、小夜は思わず面を上げる。その気配に、やっとその存在を思い出したとでも言うように上座の少年が立ち上がり、居住まいを正した。

「挨拶もせずにすみません。僕らが今後ロシアでのあなたの活動をサポートさせてもらうことになります。今ひとり所用で席を外していますが全部で五人で——僕はヴァレリといいます。」

彼が

「ロジオン」

ヴァレリが紹介するのを待たず、ロジオンはめんどくさそうに告げる。さらに重ねるように、小夜の向かって左奥の少年が、腰掛けたまま言った。

「キリル」

頬杖をつき、こちらを見もしない。そんな態度にもかかわらず、小夜はその横顔から目を離せなかった。彼が部屋に入って帽子を脱いだとき、自然に波打つアイスブロンドの髪が零れると、半地下の部屋が一気に華やいたような気さえした。

肌理の細かい肌、赤みの差した唇は、細心の注意を払って作りあげられたビスクドールを思わせる。そのせいなのか、先刻部屋に入ってきたとき見た限りでは、実際の身長はロジオンと変わらなかったのに、ずいぶん華奢な印象を受けた。その繊細な印象とは裏腹に、透明なメジストの瞳には挑むような光がある。小夜はそこに彼の勝ち気な性分を見て取った。

キリルは一瞬だけその瞳を隣の少年に向けると、告げる。

「こっちはエドアルド」

寡黙なたちなのか、エドアルドはあらためて自ら名乗ることもなくただ立ち上がって小夜を見据えると、黙礼した。背が高い、と小夜は思った。少年たちの中では一番高く、ハジにも迫るだろう。

光の加減で青みがかって見える黒髪は清潔に短く刈られている。静かな、濃い群青色の瞳の

奥底には思慮深さがあつた。その立ち居振る舞いにはまるで無駄がない。体つきは細いが、それは油断なく肉体を鍛え上げているからなのだ。衣服の上からでもわかる。

小夜は本でしか読んだことのない、東洋の剣士をなんとなく思い浮かべた。ロジオンは一見して体内の力が有り余っているが、彼は奥底で自制している。そんな感じた。

彼が腰を下ろすと、ヴァレリは再びロジオンに向き直った。

「ロジオン、座ってくださいいったら」

「はいはい。そんけーするマクシムに頼まれたからって、張り切ってるな」

ロジオンはことさらはすっぱにそう言っつて、乱暴に椅子を引き出すと腰を下ろした。すぐに落ち着かない様子で指先をテーブルに打ちつけて、こつこつと音を立て始める。

「襟と、袖」

言ったのはキリルだった。ロジオンはどうやら彼らより一足先に帰ってきていたらしいから、黒い上着はあらためてこうして集まるためにやむなく羽織ってきたのだろう。

「僕の前にだらしなない格好で座らないでくれる？」

ロジオンは、ヴァレリよりもこのキリルの方がどうやら苦手らしく、なにも言い返しはせず、「めんどくせーな」と言いながら襟の釦を留めた。続いて袖口を留めようとして、面倒になったのかわずかに顔をしかめる。結局そのままにして言った。

「ヴァレリもキリルも、俺なんかよりマクシム探してきたら？ なあ、エドアルド」

エドアルドはそれにはなにも応えず、代わってキリルが言う。

「最近単独行動多いね、あの人。まあ、僕らとは代も違うし」

「指示は、ちゃんと聞いてます！」

少し責めるような響きのキリルの言葉を、ヴァレリはさえぎった。先刻から名前の出ているマクシムというのは不在のひとりなのだろうが、ロジオンの言うとおり、ヴァレリは彼の言いつけを守ろうと懸命なようだ。どこか近寄りたがたい雰囲気を持つ少年たちの中で、彼のそんな様子は小夜には微笑ましく映る。

ヴァレリはそんな小夜の眼差しに気づいたのか、わずかに頬に朱を刷いた。それから気を取り直したように居住まいを直し、眼鏡を押し上げる。

「——とにかく、ひとまず今後の仕事の内容を確認します」

彼は一瞬だけ小夜を見ると、あとはテーブルの上に目を落とす。彼が目を落とす資料にはびっしりと文字がタイプされ、幾葉か写真も添えられているようだが、小夜の位置からはもちろん内容まではうかがえない。重々しいテーブルの下座に座ってしまったことを小夜は少し後悔した。少年たちと小夜の間には幾つもある席があるのに、彼らは距離をとってこちらを一斉にうかがっている。まるで審問にかけられているようだ。

「僕たちが赤い盾の本部から聞いているのは、三〇年前ポルドーの『動物園』から逃げ出した〈DIVA〉という生き物を追う〈SAYA〉のサポートをすること、です」

小夜は注意深く頷いた。

「〈DIVA〉が現れるところには〈翼手〉と呼ばれる生き物が一緒に現れることも、今まで

の研究でわかっている……」

小夜の紡ぐ言葉に今度はヴァレリが頷いて、先を続けた。

「〈DIVA〉および〈翼手〉は、人を襲って吸血するとみられている」

事前に知らされてはいるはずだが、吸血という言葉にあらためて室内に軽く緊張が走る。小夜は胸のざわめきを抑えて、毅然と面を上げた。ヴァレリがさらに続ける。

「夏頃、ロシアで翼手の仕業とみられる変死体が目撃されたらしいことが、最近の調査でわかりました」

「された、らしい？」

奥歯に物の挟まったような言い方に、小夜は思わず眉根を寄せた。〈DIVA〉を滅ぼす為に設立された組織、赤い盾。小夜とハジがその方針に異を唱えることは今のところ出来ない。それでも、もう少し確かな情報のために動かされたのだと思っていたのだが。

小夜の言葉の響きが気に障ったのか、きつい調子で答えるのはキリルだ。

「遺体の目撃情報があったとされるのは、皇族や貴族の別荘がある郊外で、しばらくもみ消されていったんだよね。皇族を未だ神格視しているようなこの国では、上流階級と庶民の間に大きな隔りがある……情報も、すぐには下りてこないってわけ。別に僕らが見落としていたわけじゃないよ」

「キリル」

ヴァレリが諫めるが、キリルは気に留める様子もなくそっぽを向いてしまう。ヴァレリはそ

れ以上言い募るのを諦め、小夜に向かって言った。

「おふたりにも、しばらくは情報収集の為に社交界で動いてもらわなければならないと思います。本部は了解済みなんですけど」

「——赤い盾の決定なら、私に異論はありません」

小夜は言い、ハジも頷く。それを見届け、ヴァレリは先刻までの緊張した面持ちを緩めた。

「じゃあ、寝起きは中庭を挟んだあちら側の棟を使ってください。一通り必要な物は手配してありますけど、不足があったら出迎えた家令に。僕らはみんなそれぞれ貴族の遠縁か、豪商の子息という肩書きで、日中は大抵士官学校に通っていますから……この邸は赤い盾所有のものですが、家令以外はメイドにも詳細は知らせてはいないのでそのつもりでお願いします。メイドは何人必要ですか？」

「あの」

淀みなく紡がれていく言葉を、小夜はやっとのことできえぎった。

「みんな必要最低限でいいです。自分のことは自分でやりますから」

「食事もちちらに厨房があれば私が用意します。あちらで摂っても？」

ハジが重ねる。ヴァレリは怪訝そうな表情で彼を見た。とても食事の仕度などするように見えなかったのだらう。実際のところ、小夜の身の回りの世話は今までもずっと、ほとんどハジひとりできまかかってきたのだが。

「それは……お好きなように。でも、もし人手が必要になったらいつでも用意できますよ？」

特に問題はないと判断したのか、念を押しながらもそう言うヴァレリに、ハジは穏やかに笑みを向けた。

「ありがとうございます。では部屋に下がらせてもらいましょう、小夜」

「うん——」

「報告書には」

部屋から出ようとするふたりの背を、ロジオンの声引き留める。

振り返ると、ロジオンは椅子の背に深くもたれ、脚を浮かせて器用にバランスを取っていた。頭の後ろで手を組み、相変わらずこちらを見ないままで告げる。

「SAYA」はその翼手を倒す「唯一」の武器」だって書いてあったけど、全然そんなふうには見えねえな」

（武器——）

その言葉は、実はずっとざわついていた小夜の胸にさらに重苦しくのしかかった。（でも）

自分が翼手を倒さなければならぬことは紛れもない事実だ。

だからせめて、この部屋を出るまでは平気な顔をしていなければいけない。

押し黙る小夜に、キリルがこちらを見もせず腰かけたままアイスブロードの髪を弄んで言った。

「僕らもその恩恵にあずかっているとはいえ、ジョエルって人も大変なものを遺してくれたもん

だよ。狂気じみてるっていうかさ」

「——ジョエルのこと、そんなふうには言わないで」

小夜は思わず面を上げる。その口調に一齐に集まる視線にも耐え、さらに告げた。

「私のことはかまわない。だけどジョエルのことは——」

キリルの美しい眉が、興ありげに歪んだ。

「……へえ。ずいぶん飼慣らされてるんだね、SAYAは」

「飼い——」

言葉が、刺さる。俯いてしまいそうになったとき、そんな小夜を視線から守るように人影が立つ。ハジだ。

ハジは懐に手を入れ、黙って一同を見据えている。その頬からは、いつも小夜に向ける穏やかな笑みは消え失せていた。押し殺した、冷たい怒気にも似た殺気だけが部屋に満ちていく。押し殺したもののだけにどう爆発するかわからない——そんな殺気だ。

いつの間にか椅子を揺らすのをやめていたロジオンが、獣のように瞳を輝かせて言った。

「SAYA」を護る騎士がいるって聞いてたけど、それがあんたか。ヘシュヴァリエ——」

言い終わるか否かのうちに、宙に身を躍らせる。猫科の動物を思わせるしなやかな動きで、蹴りをくり出してきた。

「ハジ——」

蹴られる——小夜は思わず目を閉じた。

——が、次の瞬間目を開けた小夜の前にあるハジの背はなにも変わらず、微動だにしていなかった。

「え……」

見れば、高く回し上げたロジオンの足を、いつの間にか間に割って入ったエドアルドが腕で制している。

彼は無言のまま、群青の瞳でロジオンを見据える。

まるで人知れず山中に水を湛える湖水のような、静かな深い青の瞳でそうされると、ロジオンの全身から放たれていた殺気が見る間に失せていくのが端にいてもわかった。

やがてロジオンは足を収め、ばつが悪そうに告げる。

「ちょっと強さ試してみたかっただけだよ」

しばらく呆気にと取られていたヴァレリが、我に返ってまくしたてた。

「ちょっとって——勝手な行動をしないでください！」

「あー、だから悪かったっーの」

小夜がそんなやりとりで気を取られているうち、エドアルドは何事もなかったかのように、もといた席に戻った。

「まあ、働きぶりはいずれわかるよ。こっちは他に仕事こなしながらなんだから、せいぜい頑張ってもらわないと困るけど」

嘆息して、キリルが冷たく言い放つ。どうやら、一番容色が華やかなのも彼なら、一番棘が

あるのも彼らしかかった。彼の隣に黙って座るエドアルドも余計な騒ぎを避けたかっただけで、格段好意的というわけではなさそうだ。

（仲間ってわけじゃない——か）

「行こう、ハジ」

小夜はつい先刻の自分の甘さを恥じる。ハジに笑顔を作ってみせると、逃げるように部屋を後にした。

「ふう……」

二間続きの部屋に案内されるなり、小夜はまっすぐに寝室に向かうと、真新しいリネンで整えられたベッドの上に体を投げ出した。笑顔で大歓迎されるとも思っていたが、流石に疲れる。

再びため息をつきそうになり、思い直して小夜はふるふると頭を振った。

（これからがもっと大変なんだから）

勢いをつけてベッドから飛び降り、先刻荷物を放り出してきた居室に戻る。黒に銀鼠で植物文様を刷りだした壁紙の部屋は、やはり家具も同じ色調で統一されていた。白い大理石の天板を貼ったテーブルの上で転がった靴を見つけ、拾い上げる。先に送った大きなトランクは壁際にちやんと揃えて置かれていた。整理しようと立ち上がり、大きな窓硝子に自分の姿が映るの

にふと気づく。

小夜は何気なく窓辺に寄り、短い髪をつまんだ。昔は、この髪も長かった。

「——お姉様」

「——!」

一瞬、硝子に移った姿が——少女が——勝手に動いたような気がして小夜は息を呑んだ。目を閉じて襲ってくる目眩に堪えようとしたそのとき、ドアが遠慮がちにノックされる。ハジだ。

「もう……おやすみになりましたか、小夜」

小夜はドアノブに飛びつくように駆け寄り、ふと思いとどまって手を止めた。深呼吸して、十分に呼吸を整える。

（——よし）

「——起きてるよ。なに？」

「お茶をお持ちしました」

お茶というからごく簡単なものを想像していたのに、ハジはワゴンを押してやって来た。盛りつけられた軽食の他に、大きな銀器が目につく。

小夜の視線に気づいたのか、ハジは微笑んだ。

「サモワールと言うそうですよ。せっかくですのよ」

ハジはテーブルの中央にそれを置くと、蓋を開けて火を入れた。蓋の上にはティーポットが載せられるようになっていて、常にお茶を温かくしておける仕組みらしい。両側に手の付いた杯のような形をした胴体の下部には栓が付いていて、いつでもお湯が出る。濃いめに出したお茶を好みで薄めて飲めるようになっていたのだ。

「凄い」

しみじみとそう呟いてしまうのは単にサモワールに感心したわけではなくて、もう手際よく使い方を覚えたり軽食まで揃えているハジに対してだったのに、当の本人は早速沸いたお茶をカップに注いでいる。カップは薄い硝子の器に金のカップホルダーをはめたものだった。複雑に植物が絡み合った、細かな細工が施されている。

「ええ、便利です。今日は用意してあったものを簡単に見繕いましたけど、厨房もなかなか使い勝手が良さそうで」

「ハジなんだか楽しそう……」

差し出されるお茶を受け取り、小夜は苦笑した。ハジはずっと昔から自分の身の回りの世話をしてくれているから、自然とそういうところが重要になってくるのだろう。

（あ——）

苦笑しながら口をつけると、ふわっとブランデーの香りが鼻をくすぐった。後に続く、びりつとした生姜と甘い蜂蜜の風味——それは小夜が疲れているとき、いつもハジが作ってくれる

ものだった。

食事をこちらでと言い出したのも、様々な事情はもとより、彼らと食卓を囲む気詰まりさを慮^{おもんばか}ってのことだろうと思いついて思わず面を上げると、ハジは特別変わった素振りもなくクッキーを取り分けたりしている。そんな姿に小夜は安堵^{あんど}を覚えた。ハジはいつでもハジだ。お茶を飲み、やっと人心地^{ひとこころ}ついた小夜は素直に漏らした。

「……ずいぶん遠いところまで来ちゃったね」

昔はあの土地から出たこともなかったのに、と思う。「そうですね」とはハジは言わずに、ただ、穏やかに告げた。

「それでもベトログラードはロシアでは西の端で、昔は『西洋への窓』と呼ばれていたそうです。北のヴェニスという呼び名もあるとか」

「ふうん……ここはベトログラードのどの辺なのかな。明日はまず地図を調べなくちゃね」

小夜は言った。疲れてはいたが、なにかすることを常に考えていなければ落ち着かなかった。

「ああ、それなら」

何気なく漏らした言葉だったのに、小夜の勧めで自分もお茶に口をつけていたハジはあっさりと応じる。

「馬車はエルミタージュを左手に見て大通りをやってきて、そこからまた左に折れました。おそらくリチエイヌイ地区でしょう。このくらいの邸^{やしき}が他にも立ち並んでいましたから、貴族の遠縁^{とつえん}と称^{しょう}して潜^{ひそ}むにはちょうどいい場所です」



「ハジ」

小夜は思わず呟いた。

「私が眠ってる間に、そんなことまで？」

いや、おそらくは地図だとか特色だとか、そういうものをハジは事前にきちんと頭に入れていたのだと、小夜は思う。……多分、この短時間で見て歩いたのも厨房だけではない。

ハジはいつでもそうやって先回りして、自分を気遣ってくれている。

(ハジは私のせいでこんなところまで来ることになったただけなのに)

言葉を見つけれられずに押し黙る小夜に、ハジはすつと膝を折って瞳を覗き込んだ。

「……私は元々ロマの民です。お忘れですか？」

小夜はかぶりを振った。ハジはまだ少年の頃、定住地を持たずに歌や踊り、占いなどで生計を立てる流浪の民、ロマから小夜の世話係として連れてこられたのだ。小夜にとって、初めて接するへ外から来た友だちだった。

「なにしろあちらこちらを移動するんですから、自然と周囲に注意を払うのが得意になっただけですよ」

ごく軽い調子でそう言って、それからすぐ、臉を伏せる。

「それにあなたは……慣れない訓練に忙しかった」

いたわるような声の響きに、小夜は思わず顔を背けた。

「必要だから、やってただけ、だから」

「では、お互い出来ることをしましょう」

やさしく重ねられると、もう頷くしかなくなるのはいつものことだ。

「……うん」

そんな小夜の様子を見届けると、さて、と声をかけてハジは立ち上がる。

「お茶が冷めてしまいましたね。でも大丈夫、まだ温かいのが沢山ありますから」

「ハジ、ほんとにこれ気に入ったんだね……」

ハジがお茶を片づけて去った後、小夜はベッドの中から長い包みを取り出した。巻き付けた布を解く。

現れたのは一振りの刀だ。

小夜は寝間着姿に裸足のまま窓辺に立つ。胸の前で腕を伸ばして刀を構えると、目を閉じた。——この刀で、斬らなければならぬものが自分にはある。

小夜は目を開け、鞘を抜き放つ。

窓硝子には己の姿が映り込んでいた。その己の姿に刀を突きつける。冬の夜の闇は濃く、構えた刀身に刻まれた特殊な溝さえも、磨き上げられた硝子は映し出していた。

——この刀は、それを斬るためのもの。

(……だけど)

自分に本当にそれが出来るだろうか、ひとりになると思う。力無く見つめる硝子の中の少

女は泣いているようにも、笑っているようにも見えた。

小夜はかぶりを振って、幻影^{げんえい}を追いやるようにきつく目を閉じる。出来ることをしましろう、とハジは言った。

(――やるんだ、どうしても)

それが、ただひとつ私に許された贖罪^{しよくざい}なのだから。

再び開くその目には、悲壮^{ひきさう}なまでの決意^{けつぎ}が漲^{みなぎ}っている。

小夜は、硝子に映った己の影^{かげ}を真一文字に斬り裂^きいた。

角川書店 ビーンズ文庫『BLOOD+ ロシアン・ローズ I』

著：漲月かりの イラスト：高城リョウ

本文 p 08 ~ 34 より